

1. 特許の出願

出願年月日	発明の名称	発明者
H19. 5. 21	貝類の養殖基盤 (ヒメジャコの人工育成基盤)	久保弘文
H19. 9. 21	健康機能成分高含有褐藻類の製造方法	須藤裕介

2. 学術誌等への投稿論文

太田 格, 2008: サンゴ礁性魚類資源の持続的な利用に向けて. *Lagoon*. 10: 6-8. (国際サンゴ礁研究・モニタリングセンターニューズレター, 2008年3月No. 10).

山本隆司, 島田和彦, 渡辺利明, 福田将数, 松尾和彦, 2008: 沖縄島南東海域におけるソデイカの水平, 垂直分布について—どこでソデイカが良く釣れるか—. 平成19年度イカ類資源研究会議報告, 22-33. 北海道区水産研究所

3. 学会・シンポジウム等での講演

1. 2007 生態工学会年次大会 口頭発表 (平成19年6月3日)

光放射環境実験装置を利用したオキナワモズクの光合成色素に対する光の影響

須藤裕介 (沖水研セ), 諸見里聰 (沖縄県庁), 畠田裕久・小澤知子・増田篤稔 (ヤンマー(株)), 村上克介(三重大)

オキナワモズクの主な生長阻害要因や品質の変化は、降雨や曇天による照度不足といわれ、曇天が一週間以上続いた場合の藻体は、薄い褐色から次第に暗褐色に変化しちぎれやすくなる。このことから、光量はモズク類の藻体色に大きく影響を与え、その藻体色は、生育状態と密接な関係を持つと考えられる。一方、モズクの養殖や加工現場では、生産物の品質管理のため藻体色の客観的な評価が求められている。そのため、光量に対する藻体の生育状態の変化を定量化することは、養殖生産と品質管理の上で重要な指標となると考えられる。

モズク類の色素の一つであるフコキサンチンは、褐藻類が保有する光合成色素で、藻体の褐色を呈するための特有の色素として知られている。諸見里ら(2006)は、モズクのフコキサンチン量の季節変動を調査し、日照とフコキサンチン含量の変化に関連のあることを示した。そこで、本試験では光放射環境実験装置を使用し、光環境に対するオキナワモズクの生長とフコキサンチン、クロロフィル a・c₂、およびβ-カロテンの含量の変化を調べた。

2. 平成19年度日本水産学会秋季大会 ポスター発表 (平成19年9月26日)

八重山諸島海域におけるサンゴ礁性魚類資源利用の現状 (講演要旨)

太田 格

【目的】 八重山諸島海域には世界屈指の高い多様性をもつサンゴ礁が発達し、特有の熱帯性・サンゴ礁性(沿岸性)魚類を対象とした漁業が営まれている。これらは資源の減少が懸念されているが、その実態は明らかでなかった。本研究では今後の資源管理を進める上で重要な資源利用の現状を把握するために、漁獲統計と市場調査によって得られた情報を合わせて分析した。

【方法】 当センターの有する漁獲統計情報(1989-2006年)から八重山海域で漁獲されたサンゴ礁性魚類のデータを抽出し、魚種銘柄ごとの漁獲量、CPUE等の経年変化を調べ、資源動向を評価した。魚種銘柄によっては複数種を含むものもあるので、市場調査情報(種査定、体長・体重測定)と漁獲統計を組み合わせ、種別の漁獲量、漁獲尾数等を推定し、それぞれの漁獲状況から資源の利用状況を評価した。

【結果】 八重山海域では少なくとも44科200種以上の多様なサンゴ礁性魚類が漁獲されるが、そのうち上位3科(ブダイ、フェフキダイ、ハタ科)、または上位15種で年間漁獲量の60%を占めており、比較的限られた魚種の貢献度が高いことが分かった。上位19科のうち10科で過去18年間のCPUEは顕著な減少傾向を示し、近年は平均で約60%に低下した。また、最大体長の50%サイズ以下の漁獲尾数の割合は、上位15種のうち6種、全体では19種が20%(範囲21-62%)を超えていた。これらのことから、多くの種で資源状態が悪化しているとともに、小型魚が多く漁獲されている等、資源利用の現状が明らかとなった。

3. 平成19年度日本水産学会秋季大会 口頭発表 (平成19年9月27日)

八重山諸島周辺海草藻場に出現する水産重要魚類稚魚の時空間的な分布の相違 (講演要旨)

太田 格

【目的】 海草藻場はフェフキダイ、フェダイ、ベラ類等の熱帯性水産重要魚類稚魚の成育場として重要であることが知られる。

本研究ではこれら魚類稚魚の海草藻場での出現の時空間的な相違について報告する。

【方法】八重山諸島周辺海域（主に石垣島名蔵湾）の海草藻場で、水産重要魚類稚魚（主にフェフキダイ科、フェダイ科、ベラ科イラ属）を対象とした潜水目視観察によるベルトトランセクト調査を実施した。調査は2005年4月から原則として各月1回、各定線（長さ150m、幅5m）を、SCUBAを用いて遊泳し、個体数、体長を記録した。また、各定線では方形枠内（25×25cm、5カ所）の海草類の株数を記録し、海草類の種構成から各定線の環境特性の類別を試みた。

【結果】対象種について各定線の平均生息密度を比較すると、調査海域内での水平分布に違いが認められた。イソフェフキ、ヒメフェダイは主に外洋に近い湾口部付近に多かったのに対し、ハマフェフキ、タテシマフェフキ、ニセクロホシフェダイ、クサビベラは湾奥部に多く、シロクラベラでは湾奥の特定海域にのみ出現した。さらに、湾口部、湾奥部に出現するそれぞれの種間で加入時期、出現期間は異なった。例えば湾奥部ではハマフェフキが4-5月頃に加入し、生息密度は7月頃最大になるのに対し、タテシマフェフキでは7-10月に加入があり、生息密度は11月に最大となった。このように海草藻場に出現する稚魚群集全体では7-11月に生息密度が高いが、種によって時間的、空間的な相違が認められた。また海草類7種の平均株密度から各定線をクラスター分析により類別した結果、出現する稚魚群集の環境指標となりうることが示唆された。

4. 平成19年度日本水産学会秋季大会 口頭発表（平成19年9月27日）

オキナワモズクのコキサンチン含量に及ぼすPPFDと施肥量の影響

須藤裕介（沖水海研セ）、嘉手苺崇・當山洋・安元健（沖縄県CREATE,JST）

【目的】オキナワモズク等の褐藻類に含まれるコキサンチン（FX）は抗酸化活性や抗腫瘍活性など幅広い生理作用を有し、健康機能成分として注目されている。本研究では、オキナワモズク藻体のFX含量を高めるため、藻体のFX含量に及ぼす光合成有効光量子束密度（PPFD）と施肥量の培養条件の影響を調べた。また、有用成分の1つであるフコステロール（FS）およびクロロフィルa（Chl a）の分析も行った。

【方法】供試藻体は、沖縄県南城市および伊是名村の養殖漁場から採取したオキナワモズクを用いた。培養試験は以下の条件で2回行った。第一回試験では、PPFDを3段階（5, 58, 447 $\mu\text{mol}\cdot\text{m}^{-2}\cdot\text{s}^{-1}$ ）、施肥中のNP濃度を3段階に調整し、第二回試験では、PPFDを2段階（5, 58 $\mu\text{mol}\cdot\text{m}^{-2}\cdot\text{s}^{-1}$ ）、NP濃度を4段階に調整した。供試藻体は各区20gとし、1Lフラスコ中で5日間培養した（各試験区n=3）。試験開始時と終了時の藻体は、湿重量を測定し、HPLCとGC-MSを用いてFX、Chl a、FS含量を分析した。

【結果】第一回、第二回試験の結果、低PPFD、並びに高施肥量条件で、藻体のFX、FS、Chl a含量が増加する傾向がみられた。特にFX含量は高施肥量条件で増加し、第一回試験の最高施肥量区で約2倍、第二回試験の最高施肥量区で7~10倍の収量を得られた。今回の試験結果により、オキナワモズクの培養条件を調節することにより、FXやFSなど有用成分の含量を高めることができることが示され、産業利用が期待される。

沖縄県で養殖される主な海藻類はもずく類（オキナワモズクとモズク）、クビレズタ（海ぶどう）、ヒトエグサ等が挙げられる。その中でも、平成17年のもずく類の養殖生産量は13,291t、生産額は約31億円と主要な養殖品目となっている。

5. 平成19年度日本魚病学会 口頭発表（平成19年9月29日）

養殖ヤイトハタより分離されたイリドウイルスの性状解析

中村博幸・知名真智子（沖水研）、木村肇・鎌田良男・真鍋貞夫（財）阪大微研

【目的】沖縄県内で養殖されたヤイトハタについて、イリドウイルス病が疑われる死亡及び瀕死魚からウイルスを分離し、既知のマダイイリドウイルス Ehime-1株との性状を比較した。

【方法】1.材料：沖縄由来養殖ヤイトハタ脾臓。2.イリドウイルス抗原の検出：脾臓乳剤をイサキヒレ株化細胞（以下GF細胞）に接種後、モノクローナル抗体を用いた間接蛍光抗体法によりウイルス抗原の検出を行った。3.ウイルスゲノムの解析：脾臓乳剤からDNAを抽出後、Ehime-1株主要外殻タンパク質遺伝子に設定したプライマーを用いたPCR法によりウイルスゲノムを増幅し、ダイデオキシ法により塩基配列を決定した。4.ワクチンの有効性：ヤイトハタ稚魚の腹腔内にワクチンを0.1mL投与した後、Ehime-1株及び分離されたウイルスを腹腔内攻撃し、観察を行った。

【結果】間接蛍光抗体法によるイリドウイルス抗原の検出を行った結果、Ehime-1株と同様な反応性が確認された。また、増幅されたPCR産物の塩基配列は、Ehime-1株と高い相同性を有していた。さらに、ワクチンを投与したヤイトハタ稚魚にEhime-1株及び今回分離されたウイルスで攻撃した結果、試験期間中の死亡率はワクチン投与群と対照群との間で統計学的に有意な差が認められた。

以上のことから、Ehime-1株とウイルス学的に極めて類似したイリドウイルスがヤイトハタより分離され、予防対策としてのワクチンの有効性が示唆された。

6. 2007 年度日本海洋学会秋季大会 シンポジウム「沖縄における海洋研究」 講演（平成 19 年 9 月 29 日）

沖縄県における海藻類養殖研究

須藤裕介

沖縄県で養殖される主な海藻類はもずく類（オキナワモズクとモズク）、クビレズタ（海ぶどう）、ヒトエグサ等が挙げられる。その中でも、平成 17 年のもずく類の養殖生産量は 13,291t、生産額は約 31 億円と主要な養殖品目となっている。

【もずく類の研究】沖縄県におけるオキナワモズク養殖の研究は、1972 年から沖縄県水産試験場（現沖縄県水産海洋研究センター）において、生活史の解明や生態調査を中心に取り組みが始まった。一方、養殖生産は 1974 年から、恩納・知念・今帰仁漁協と水産業改良普及所（現水産業改良普及センター）により養殖試験が取り組みられ、1977 年には初めて 18.2t の養殖生産が上げられた。また、1980 年からはモズクの生産が始められた。もずく類の生産量は徐々に増加し、1986 年には 5,511 t、1999 年には 20,485 t にまで達した。一方で、2000 年から 2006 年の生産量は 12,696～21,021 t と大きく変動しており（モズク養殖業振興協議会資料）、生産安定のための生育環境の調査、養殖技術の改良、並びに優良種苗の育種技術開発が求められている。もずく類の生産を左右する要因の一つとしては、苗床と呼ばれる中間育成漁場での直立藻体の形成（発芽）が重要となる。これまでの研究では、諸見里ら(2001, 2002)によってオキナワモズクのフリー盤状体を利用した採苗技術の開発、並びに採苗時の施肥による生長促進技術の開発が行われ、苗床における発芽と生長の技術改良が行われてきた。現在は、もずく類の安定生産に向け、発芽に及ぼす水温や栄養塩条件について実験を行うと同時に、漁場での水温モニタリングを行っている。また、これまでの研究では、モズクの室内育成技術の開発を行い、人工環境下において発芽藻体を育成することに成功している。その後の当センターで行った実験では、オキナワモズクでも人工環境下において直立藻体を育成できることを明らかにした。今後はこれらの育成技術を確立することで、管理された環境で発芽条件の解明に向けた研究を行うことができると考えられる。また、人工環境下で育成した藻体から、優良種苗の選抜が可能となると考えられる。

【その他の海藻類の研究】その他の養殖対象種としては、クビレズタ、ヒトエグサ等が挙げられる。クビレズタの生産額は、平成 17 年で約 3.6 億円に達し（沖縄県総合事務局農林水産部統計資料）、主要な養殖対象種の一つとなっている。現在、その安定生産に向けた技術改良に取り組んでいる。また、海藻サラダや佃煮の原料として利用されるオゴノリ的一种については、陸上養殖技術が開発され実用化されている。今後は、海藻類養殖の可能性をさらに広げるため、他の養殖対象種についても検討を行っていく。

7. 2007 年度日本海洋学会秋季大会 シンポジウム「サンゴ礁とその周辺海域の環境」 講演（平成 19 年 9 月 30 日）

調査船による沖縄周辺海域の観測

下條 武

沖縄本島周辺海域は、台湾東方から東シナ海に流入し大陸棚縁に沿って北上する黒潮や、東方から沖縄南東海域へ向かって西進する中規模渦の影響下にある。例えば、浮魚礁での流速・水温の連続観測と定線観測等から、沖縄本島東シナ海側における春季の水温は、黒潮の接近により一時的に上昇することが分かっている。また夏季に高気圧性渦が本島に到達すると高水温となる。本島周辺海域の漁場形成には黒潮や中規模渦が関連すると考えられ、これらの観測による海況把握は非常に重要である。ここでは、沖縄県水産海洋研究センター漁業調査船「凶南丸」による沖合定線観測結果等から、本島東シナ海側海域での春季の水温変動の過程と、本島南部海域での中規模渦による水温変動を報告する。この調査は沖縄県による単独事業の他、国庫補助事業である新漁業管理制度推進情報提供事業、海洋構造変動パターン解析技術開発試験事業、水産庁委託事業である資源評価調査委託事業により実施した。

【データ】 沖縄本島南部海域から黒潮を横断し、大陸棚斜面にまで達するような定線について、年 6 回実施した CTD 観測結果等を使用した。観測データは、(独) 水産総合研究センター西海区水産研究所提供の漁海況解析ソフトで解析した。

【結果と考察】 図 1 に沖縄南部海域における 1997～2006 年の 8 月の水温鉛直時系列と水温年間偏差を示す(平均期間は 1997～2006 年)。1998、2001、2003 年には水深約 20m 深付近まで 30℃台の高水温層が見られた。2004 年の表面水温は年間平均であるものの、水深約 50～100m 付近の水温は年間平均より約 2℃高かった。1998、2001 年の本島付近は、海面高度偏差図の正の偏差域（高気圧性渦）に覆われ、また 8 月に台風接近がほとんど無い年であった。この高水温層の鉛直スケールは海面から約 800m 深まで達し、水温は年間平均と比較して 0～1℃以上高かった。2003 年観測時の海面高度偏差は 5～0 cm 程度であり、2004 年は正の偏差域の縁辺であった。1999、2000、2002 年の鉛直水温は年間平均より 0～1℃以上低かった。2005 年は水深約 50～100m 付近の水温が年間平均より 1℃以上低く、水深約 400～450m 付近で年間平均より 1℃以上高かった。2006 年は水深約 50～400m 付近の水温が年間平均よりやや低めであった。

8. 平成20年度日本水産学会春季大会 ポスター発表（平成20年3月30日）

ヒメジャコ (*Tridacna crocea*) の成長を早める飼育方法

山本隆司・玉城 信・中村博幸・須藤裕介（沖縄水海研セ），岩井憲司（沖縄水海研セ），井上 顕（沖縄水海研セ石垣）

【目的】 ヒメジャコは、シャコガイ類中最も美味な種類で、沖縄県では寿司ネタや刺身で消費されている。沿岸部の琉球石灰岩や塊状ハマサンゴ等のへい死した部分に穿孔して生息している特性上、乱獲に合いやすく、漁獲量は1980年以降低水準で推移している。放流方法として、岩盤にドリルで穴を空け8mm種苗を埋め込み蓋をする埋め込み法が開発されたが、現在では同様の方法で養殖（地蒔き式養殖）が行われている。地蒔き式養殖は岩盤にエアードリルで穴を空けるため労力が大変なこと、盗難や食害に合いやすいこと、収穫まで5ヵ年かかる等の難点も多い。そこで新たな養殖方法を開発する目的でヒレジャコで用いられていたケージ式飼育法を改良して成長試験を行った。また、成長が早くなるのは照度が大きく影響していると思われたので最適照度を知る試験を行った。

【方法】 試験Ⅰ：ケージは、縦、横各1m、高さ40cmのドブ付けアングル製土台の上に塩ビ板で小区画を設けた厚さ4cmのコンクリート板を乗せ、食害防止のために上面には8mm×9mmのネトロンネットを被せたものである。ケージは2基製作し、沖縄県石垣島川平湾内の水深2mの海底に設置した。それぞれに20mm種苗264個を入れ試験した。試験Ⅱ：1)屋内での人工照明飼育装置を使用した照度別(50~250 μmolm⁻²s⁻¹)飼育試験、2)陸上水槽での遮光率(0~90%)を変えての照度別飼育試験。

【結果】 試験Ⅰ：殻長8cmに達するのに天然貝で約5年3ヵ月、今回の試験で約3年4ヵ月で、大幅に成長が早くなり穿孔させなくても8cm以上に成長することが明らかとなった。これは、1)ヒメジャコは岩盤に穿孔して穴を大きくしながら成長するが、穿孔させない飼育をしたため穿孔に要するエネルギーが成長に回ったかもしれないこと、2)貝同士が接触することにより成長の鈍化やへい死が起こると想定し、接触を軽減するため小区画を設けたこと、3)ネトロンネットにより遮光されたこと、と思われた。試験Ⅱ：現在実施中であり途中経過について報告する。(試験Ⅰは社団法人全国沿岸漁業振興開発協会の委託により行われた)

4. 外部での成果報告

年月日	会名、対象等	氏名	タイトル
H19. 7. 23	沖縄県漁業士会情報交換会（糸満市）	山本隆司	ソデイカ漁場について
		須藤裕介	もずく類研究の取り組み
H19. 8. 10	平成19年度イカ類資源研究会議 (北海道区水産研究所主催)	山本隆司	ソデイカの水平、垂直分布について —どこでソデイカが良く釣れるか—
H19. 10. 23	亜熱帯の漁業資源・増養殖に関する勉強会 (西海区水産研究所石垣支所主催)	久保弘文	亜熱帯域におけるシャコガイ養殖の現状と 今後の展開
H19. 11. 13	沖縄県地域結集型共同事業報告会（那覇市）	須藤裕介	健康機能成分を強化するためのオキナワモ ズクの培養法
H20. 1. 16	沖縄県青年・女性漁業者交流大会（那覇市）	山本隆司	ソデイカ漁場について
H20. 1. 22	日本資源保護協会平成19年度巡回教室 (奄美市)	玉城 信	沖縄県におけるシラヒゲウニの資源管理
H20. 1. 29	沖縄県の水産資源の回復に関する勉強会 (西海区水産研究所石垣支所主催)	海老沢明彦	沖縄県の魚類の資源管理
〃	〃	太田 格	八重山の沿岸性魚類資源の現状
H20. 2. 5	平成19年度南西諸島栽培漁業技術連絡協議会 技術部会（鹿児島市）	玉城英信	石垣島周辺海域におけるウイルス性神経壊 死症の感染状況
〃	〃	久保弘文	シャコガイ資源・養殖のトピック紹介
H20. 2. 26	平成19年度貝類養殖生産者会議（糸満市）	久保弘文	ヒメジャコの人工育成基盤について
H20. 3. 14	平成19年度魚類生産者会議（名護市）	玉城英信	沖縄県におけるウイルス性神経壊死症の発 症状況

5. 所内での成果報告

年月日	氏名	タイトル	備考
H19. 4. 27	近藤 忍	パヤオ周辺のマグロ類の行動調査について	本所談話会
H19. 7. 31	山本隆司	沖縄海区におけるソデイカの水平、垂直分布について	本所談話会
H19. 9. 21	須藤裕介	オキナワモズクのコキサンチン含量に及ぼすPPFDと施肥量の影響	本所談話会
H19. 9. 25	下條 武	調査船による沖縄周辺海域の観測	本所談話会
H19. 9. 25	須藤裕介	沖縄県における海藻類養殖研究	本所談話会
H19. 4. 17	久保弘文	シラナミの漁業生物学的新知見	石垣支所ゼミ
H19. 6. 15	太田 格	沖縄・八重山の漁業資源の現状	石垣支所ゼミ
H19. 8. 16	井上 顕	トガリシラナミの種苗生産ってもしかして難しい？	石垣支所ゼミ
H19. 9. 19	太田 格	八重山諸島周辺海草藻場に出現する水産重要魚類稚魚の時空間的な分布の相違	石垣支所ゼミ
H19. 11. 1	久保弘文	沖縄におけるシャコガイ養殖の現状と展望	石垣支所ゼミ
H19. 12. 17	狩俣洋文	石垣島で利用されている海藻類	石垣支所ゼミ
H20. 2. 15	木村基文	ヤイトハタの種苗生産規模の推移	石垣支所ゼミ

6. 水産海洋研究センターニュース執筆

No.	発行月	氏名	タイトル
7号	H19. 4	上原孝喜	就任挨拶
		山田真之	平成19年度事業の概要
8号	H19. 7	須藤裕介	もずくの安定生産に向けて
		山田真之	新しい海藻の養殖を目指して
9号	H20. 1	久保弘文	トガリシラナミを紹介します
		松尾和彦	加工の研究始めました
10号	H20. 2	狩俣洋文	新たな養殖有望魚種の開発に向けて
		下條 武	四方を海に囲まれた沖縄にできること
11号	H20. 3	近藤 忍	パヤオのマグロは何を食べているのか？
		中村博幸	ヤイトハタ養殖におけるワクチン利用の実現に向けて～イリドウイルス病の予防～

7. 委員会等委員

氏名	委員会等の名称
本所	
上原孝喜	(財) 亜熱帯総合研究所評議員
〃	(財) 中城湾沿漁業振興基金評議員
〃	亜熱帯研究プロジェクトの可能性調査研究企画委員会 (内閣府受託事業)
〃	平成 19 年度統合的沿岸・流域・森林管理に関する研究推進委員会 (沖縄県事業)
海老沢明彦	ジュゴンと漁業の共存のための技術開発委託事業技術開発検討委員会 (水産庁委託事業)
山田真之	沖縄県モズク養殖業振興協議会幹事会
須藤裕介	沖縄県地域結集形共同研究事業平成 19 年度共同研究推進委員会
石垣支所	
照屋忠敬	(独) 水産総合研究センター西海区研究所小課題評議会議
〃	(独) 水産総合研究センター西海区研究所動物実験委員会
久保弘文	沖縄県希少動植物保護条例検討委員会
〃	亜熱帯研究に関するプロジェクト分科会検討委員会 (内閣府受託事業)
太田 格	石西礁湖自然再生協議会

8. 職員研修

年月日	氏名	内容
H19. 6. 19-21	玉城英信	平成 19 年度養殖衛生管理技術者等育成研修「特別コース」
H19. 8. 22-24	平手康市	平成 19 年度地球観測衛星データ利用セミナー
H19. 11. 26-12. 6	知名真智子	平成 19 年度養殖衛生管理技術者等育成本科コース第 3 年次研修

9. 研修・インターンシップ受け入れ、イベントでの研究紹介等

年月日	内 容
本所	
H19. 4. 16～4. 20	科学技術週間パネル展示（沖縄県庁県民ホール）
H19. 4. 25	企画部研究機関視察（22名）
H19. 6. 26～6. 29	南部工業高校インターンシップ（1名）
H19. 7. 3～7. 5	糸満高校インターンシップ（2名）
H19. 7. 11～7. 13	那覇西高校インターンシップ（3名）
H19. 7. 23～7. 25	豊見城南高校インターンシップ（3名）
H19. 7. 24	海外漁業協力財団水産指導者要請コース研修（8名、フィジー他5カ国）
H19. 8. 10	国際協力事業団（高知大学）沖縄方面視察研修（10名、アルゼンチン他6カ国）
H19. 8. 10	国際協力事業団（東京大学）水産施設視察研修（2名、メキシコ）
H19. 9. 3～9. 14	沖縄国際大学インターンシップ（2名）
H19. 9. 12	企画部試験研究機関初任者研修（6名）
H19. 9. 26～9. 28	開邦高校インターンシップ（1名）
H19. 10. 16～10. 19	沖縄水産高校インターンシップ（4名）
H19. 10. 26～10. 28	第31回沖縄の産業まつりパネル展示（奥武山公園・県立武道館）
H19. 11. 8	沖縄県立糸満青年の家主催「わくわくセカンドスクール」（35名）
石垣支所	
H19. 6. 14	川平小学校1・2年生見学（18名）
H19. 6. 18	シャコガイ放流（川平小学校50名）
H19. 7. 6	国際協力事業団（自然環境研）サンゴ保全研修（7名、タイ他4カ国）
H19. 7. 7～8	八重山の産業まつりパネル展示（石垣市中央運動公園屋内練習場）
H19. 8. 7	国際協力事業団（高知大学）沖縄方面視察研修（10名、アルゼンチン他6カ国）
H19. 8. 22	シャコガイ種苗生産研修（平良市漁協2名）
H19. 8. 30	北海道大学学生実習（渡邊准教授他学生9名）
H19. 9. 5	糸満漁協青年部視察研修（11名）
H19. 9. 7	国際協力事業団（東京大学）水産施設視察研修（2名、メキシコ）
H19. 9. 11	川平わかば幼稚園見学（13名）
H19. 9. 13	国際協力事業団（県衛環研）水産施設視察研修（5名、ベトナム他2カ国）
H19. 10. 16	八重山商工高校観光コース視察研修（20名）
H19. 10. 20	八重山漁協お魚祭り パネル・生き物等展示（八重山漁協セリ場）
H19. 11. 13	小笠原島漁協視察研修（1名）
H20. 3. 8	八重山漁協お魚祭り パネル・生き物等展示（八重山漁協セリ場）
H20. 3. 26	金武漁協視察研修（7名）
H20. 3. 31	WWF サンゴ礁保護研究センター・白保鹿島子ども交流隊施設見学（27名）